



高橋ブランカ、ステップス初個展である。「作家、翻訳家、写真家、舞台女優。1970年旧ユーゴスラヴィア生まれ。1993年ベオグラード大学日本語学科卒業。1995年来日。1998年日本に帰化。1998-2009年、夫の勤務で在外生活(ベラルーシ、ドイツ、ロシア)。著書「月の物語」(2015年、セルビアで出版、クラーリエヴォ作家クラブ賞受賞)他(『クリミア発女性専用寝台列車』)。

高橋は今回、《Sleepless in Russia》と題する連作を18点、出品した。全て人物の肖像画であり、ロシアに滞在中に撮影されたのであろう。自然な表情があれば、モデルとして撮影を依頼したと感ぜられる作品もある。



何よりも大切なことは、高橋の場合、生きている者達の瞬間が永遠に閉じ込められたのではなく、逆に、写真を見る者が見ることによって永遠に閉じ込められている瞬間が動き出すことにあると私は会場にいる時に感じた。

つまり、写されている人がまだ生きているのか死んでいるのかということを考えさせずに、視線を注ぐと共に写真が動き出し、「私はここから遠くはなれた場所に存在している」と主張しているように見えるのだ。

人間は記憶を携える為に想像力が生まれる。自己を他者や事物に置き換えて考えることができる。自分がエンパイアビルの天辺にいと想像すると身が竦む。それはキングコングを知っているからだ。ヘーゲルのいう「借定」である。写真が生々しいのではなく、人間とは本当に生々しい存在であり、そう簡単に屈しない。しつこく、必死に生きる。ここに写るロシア人が特別なのではなく、そのような人間の本質をブランカは写真を用いて抉り出している。

暫く時間を置いて評を書くために再びブランカの写真をみると、とても驚く。私はブランカの作品が非常に動的だと思っていたのだが、ここで見ると限りなく静謐なのである。それは写真を通して写真を見るからだろうか。

私の写真に撮られたブランカの写真は、熱い性質を保ったまま、また異なった冷たい状態という姿を顕わにしたのではないだろうか。そう書いて、熱い、冷たいという私の表現は、少し稚拙のような気がする。

ブランカの写真には人肌の、体温を感じる。風に吹かれても、海に浸っても、太陽に照らされても、ある程度変わらない人間の内臓の温もり。それが皮膚を通じて表に表れる。吐息、涙、発汗、嘔吐など人間は様々に活動するが、生きていることが重要なのだ。ブランカの写真にはそれがある。

